

在、このシステムの検証を行っているところである。

3. 現在、今後の研究計画

これまでの当研究所における、気象に関する調査は光化学スモッグ、酸性雨等に関する調査研究において、通常は36箇所ある常時監視測定局に設置されている気象観測装置の観測結果の解析に加えて、汚染メカニズム解明の手段として必要に応じて、トレーサー、パイバル、テザードバルーン等を用いる調査を計画して行ってきた。これらの調査結果によると、東京における境界層内の気流構造は、非常に複雑であることが明らかとなった。このため、各汚染物質の高濃度現象の未然防止、環境基準達成のため、都市気象の実態を明らかにすることが急務であると判断され、平成元年度に都市気象そのものに着目した新しい研究課題を設けた。初年度はテザードバルーンによる、都市気象立体構造調査、都市における気温分布解析、局所地点の乱流調査（超音波風速計）を実施している。来年度以降には、気流の循環系、局所汚染につながる局所気流を明らかにすることを目的として、飛行船にサーマルビデオシステムを搭載しての地表面温度分布調査、東京湾上の気流調査、ランドサットの解析による地表面温度経年変化解析等を計画している。

更に、気象に関係深く、最近話題となっている酸性雨については、1973年から独自に開発した手法で継続して、酸性雨の分析および解析をおこない、貴重なデータを集積してきた。今後は地球規模の大気汚染対策の一環として、小笠原、東京西部山岳地域の観測を加え、一層綿密な調査を計画している。

4. おわりに

自慢になる話ではないが、今年度、当研究所に新規採用の研究員が1名入所してきた、実に15年ぶりのことである。若い意欲に燃え、フレキシブルな考えを持つ若い研究員の採用が望まれるところであるが、当研究所に入るには2つの関門を潜らなければならない。1つは東京都職員採用試験に合格することであるが、気象に関する物理職種がないため、気象を専門に研究したい人にとっては、化学か土木等専門外の職種で採用試験に臨まなければならない、更に難しくしている。もう1つは、研究所に空ポストがあるかである。しかし、門は完全に閉ざれているものではないので、是非、当研究所に入所して新しい見地での研究を押し進めてもらいたいと期待するものである。

日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
環境科学会	平成元年11月29日 ～12月1日		虎の門パストラル	
日本風工学会	平成元年11月30日 ～12月1日	日本風工学会	東京大学	
リモートセンシング学会	平成元年12月5日 ～7日		東京芝機械振興会館	
第36回風に関するシンポジウム	平成元年12月6日		筑波大学大会館	Vol. 36, No. 10
第5回オホーツク海と流水に関する国際シンポジウム	1990年2月4日 ～6日		紋別市民会館	Vol. 36, No. 9
国際シンポジウム Assimilation of Observations in Meteorology and Oceanography	1990年7月9日 ～13日	WMO	フランス, Clermont-Ferrand	Vol. 36, No. 3
西太平洋地球物理会議	1990年8月21日 ～25日	AGU	金沢	Vol. 36, No. 6